

山 東 22 号 古 墳

—県道和歌山橋本線改良工事に伴う発掘調査概報—

1992年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

山 東 22 号 古 墳

— 県道和歌山橋本線改良工事に伴う発掘調査概報 —

1 9 9 2 年 3 月

財団法人 和歌山県文化財センター



玉類



その他装身具



刀装具

序 文

和歌山市に所在します岩橋千塚古墳群は全国でも有数の規模の古墳群で、その一部は国の史跡に指定されております。この古墳群は現在600余基の古墳が確認されておりますが、開墾などで消滅したものも多数あるとおもわれます。

山東22号古墳も開墾によって消滅していた古墳でありましたが、この地に県道と和歌山橋本線の建設が計画され、試掘調査を実施いたしましたところ、古墳の存在を確認することができましたので、引き続き当センターが発掘調査を実施した次第であります。

このたびの発掘調査の結果、山東22号古墳は県下でも、有数の規模の墳丘と石室をもつ古墳であることが判明いたしました。また、副葬品の多くは盗掘により散逸しているようではありますが、それでもなお往時の豪華さを偲ぶ品々が多数発見されております。したがって、山東22号古墳に葬られた人物は古代紀伊国でも相当有力な豪族であったことが考えられます。

このように、山東22号古墳は古代紀伊国の歴史にとって欠くことのできない資料ということが出来ます。

ここに発掘調査の成果の概略を刊行する次第であります。本書が地方史研究の一助となりますれば幸いと存じます。

また、関係諸機関の御努力の結果、山東22号古墳の石室は保存されることになりました。そのことを御報告すると共に、調査に御協力いただきました関係機関ならびに各位の皆様に厚く御礼を申し上げます。今後ともなお一層のご協力を賜われますようあわせて御願い申し上げます。

平成4年3月

財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 仮谷 志良

第 I 章 前 章

第 1 節 古墳の位置・調査前の状況

A. 位 置 (第 1 図 図版 1)

山東22号古墳は和歌山市の東郊にある^{きれ}吉礼地区に所在し、東経135°11分48秒、北緯34°11分48秒に位置する。この古墳は岩橋千塚古墳群の一角にあり、同古墳群の地区区分に即せば寺内地区に相当する部分にある。

もうすこし細かな地形についてふれると、岩橋山塊の南麓には、岩橋千塚古墳群で最大の前方後円墳である天王塚の所在する山瘤から、和田川の支流である彦次川に沿って南に延びる丘陵がある。その丘陵の端は小さな谷状の地形により区分され、丘陵の南端は独立丘陵状の地形をなしている。山東22号古墳は谷状地形により区分された北側の尾根上にあり、微視的には丘陵の南端に位置するようにみえる。古墳の位置する部分の標高は約31.7mである。

山東22号古墳のある丘陵には古墳の分布は比較的疎であるが、当古墳の北方約500mのところには、古墳時代～平安時代にかけての須恵器生産地である^{きれ}吉礼^{さらだに}砂羅谷窯跡群が所在している。

B. 調査前の状況

当該地域の丘陵は果樹園に利用されているところが多く、開墾時の地形の改変が著しい。山東22号古墳の墳丘も大規模な削平を受けて失われ、丘陵上は平坦面をなしていたが、付近に果樹園の境界として堀残された土塁状の部分があり、そこから旧地形を僅かに推測することができる。

この土塁状ものは地山を堀残したもので、長さが約9m、幅は約1mあり、北側から緩やかに高まり、南端は垂直にカットされている。南端の最高所は耕作面との比高差が約1mある。したがって、果樹園に開墾される以前は、このあたりは現状より1m以上の高さがあったことがわかる。

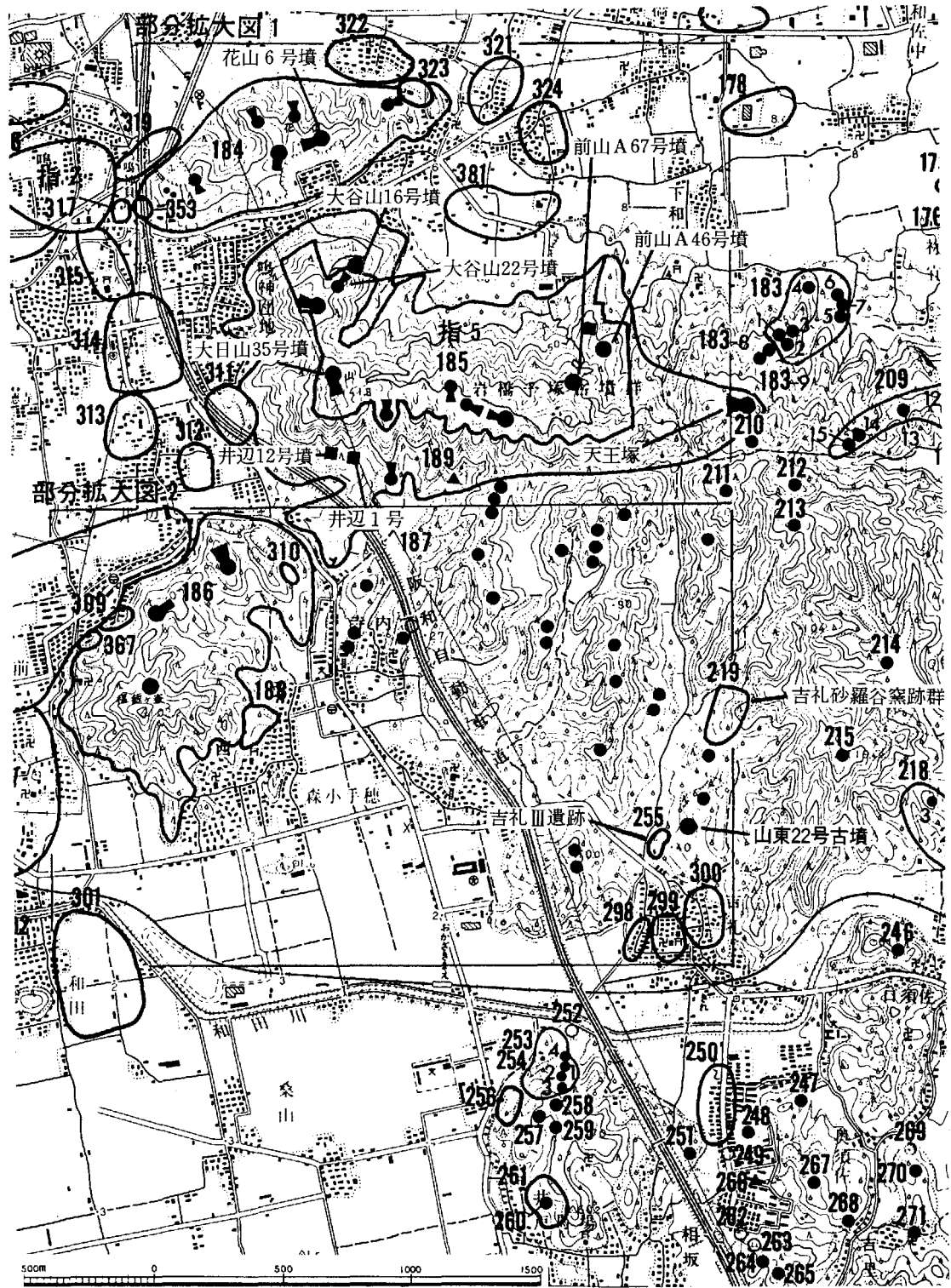
第 2 節 調査の経緯

墳丘が削平されていたため古墳の存在は周知されていなかったが、当該地に県道^{和歌山橋本線}の建設が計画され、和歌山県教育委員会が平成3年3月に試掘調査を実施した結果、横穴式石室の存在が確認された。そのため、和歌山県土木部和歌山土木事務所より委託を受けた当センターが、同年9月から発掘調査を実施した。

発掘調査の結果、県下でも有数の規模の墳丘と石室が検出されたため、関係諸機関が協議のうえ道路設計の一部変更をおこない、石室部分については埋め戻して保存することになった。

第 3 節 調査の方法 (第 2 図)

調査対象地は、地表から約50cmの深さまで果樹園の耕作土層が覆っていることが試掘調査で判明していたので、耕作土層はバックホーで除去した。玄室床面は攪乱を受けていたが、玄室内埋土の下部は第2図に示した区画に従って持ち帰り、水洗に付した。その結果、多くの微細な遺物を検出することができた。遺物の一覧表に記載している遺物の出土位置はこの区画のことである。



遺跡名	種類	参考文献	遺跡名	種類	参考文献
天王塚	前方後円墳	和歌山県「和歌山県史跡名勝天然記念物調査報告書1」1921年	吉礼砂羅谷竊跡群	竊跡	大谷女子大学資料館「吉礼砂羅谷古竊跡群発掘調査概要報告書」1979年
大谷山22号墳	前方後円墳	関西大学考古学研究室「岩橋千塚」和歌山市教育委員会 1967年	吉礼Ⅲ遺跡	散布地	
大日山35号墳	前方後円墳				
花山6号墳	前方後円墳				
井辺1号墳	方墳				
井辺12号墳	方墳				
前山A46号墳	円墳				
前山A67号墳	円墳				

第1図 周辺の遺跡

第II章 調査成果の概要

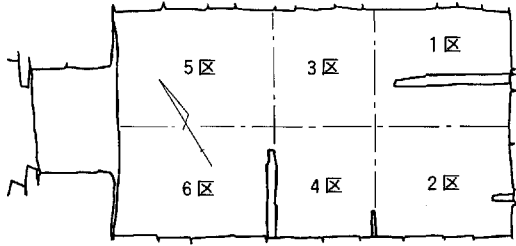
調査の範囲は第3図に示した如くで、道路計画の範囲内に届まっている。したがって、古墳の全容が追及できたわけではなく、一部に不明な点も残した調査であったが、以下、調査で判明したことの概略を記述する。

第1節 墳丘 (第3～5図 図版1・5)

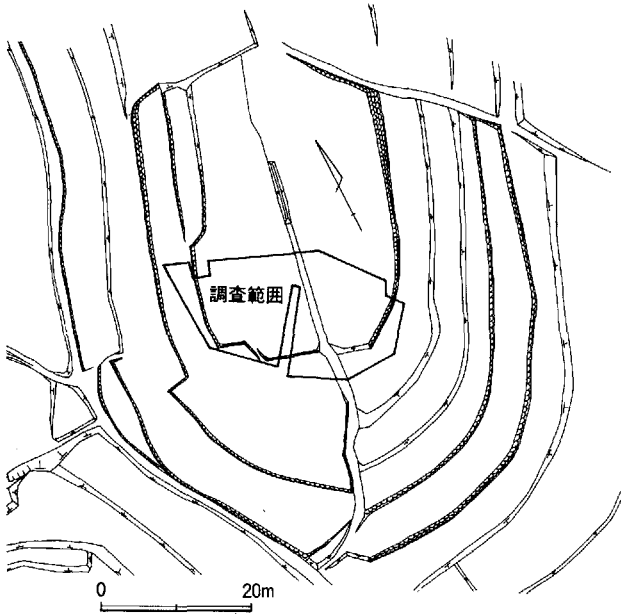
墳丘は削平されており、果樹園の耕作土や整地層を除去すると大部分では岩盤が露呈する状態であったが、調査区の西南部の一部で墳丘・その裾部が遺存していた。

墳丘・その裾部は断面C-C'で顕著に観察できる。それによれば、墳丘は地山の土で構成されており、裾部には幅50cmほどの溝状の遺構が巡る。この溝状遺構の外側にも、墳丘を構成する土と同質の土層の堆積が確認できることから、溝状遺構は墳丘の整形のために掘削されたものと判断できる。

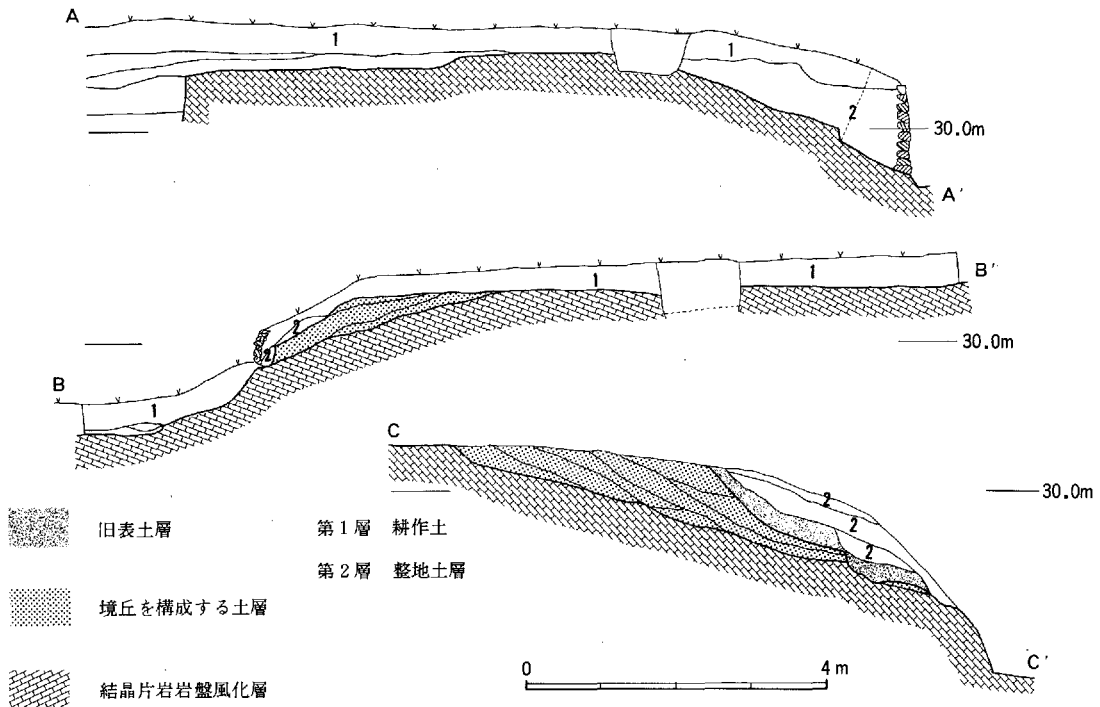
遺存していた墳丘裾部は玄室の中心部から半径約13～14mの弧状を描き、土塁状の境界に残る傾斜変換



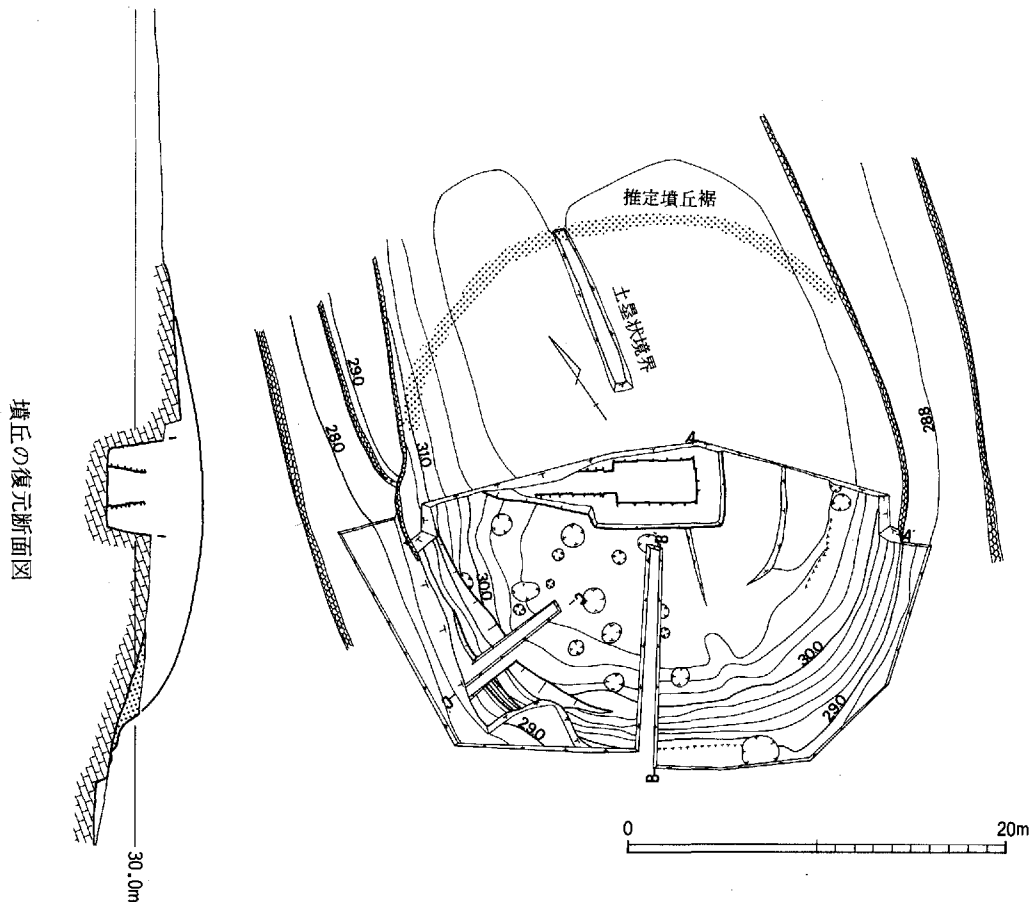
第2図 玄室内の遺物取り上げ区画



第3図 周辺の地形と調査範囲



第4図 墳丘土層



第5図 墳丘

点も、この円周線に合致している。したがって、周辺の地形を考慮すると北側に前方部を持つ前方後円墳である可能性も残されているが、本古墳は直径約26~28mの円墳である公算が強いといえる。第5図に示した復元断面図は以上の判断にしたがって作成したものである。なお、前方後円墳であるとすれば全長約35mの規模が推定され、何れにしても和歌山県の古墳としては大規模な墳丘をもつ古墳である。

墳丘に埴輪列や列石は確認されていないが、遺存している墳丘の傾斜部は幅約1mの平坦面をもつ二段の階段状をなしており、本古墳は二段もしくは三段に築成されていたものと考えられる。

第2節 主体部 (第6~8図 図版2~5)

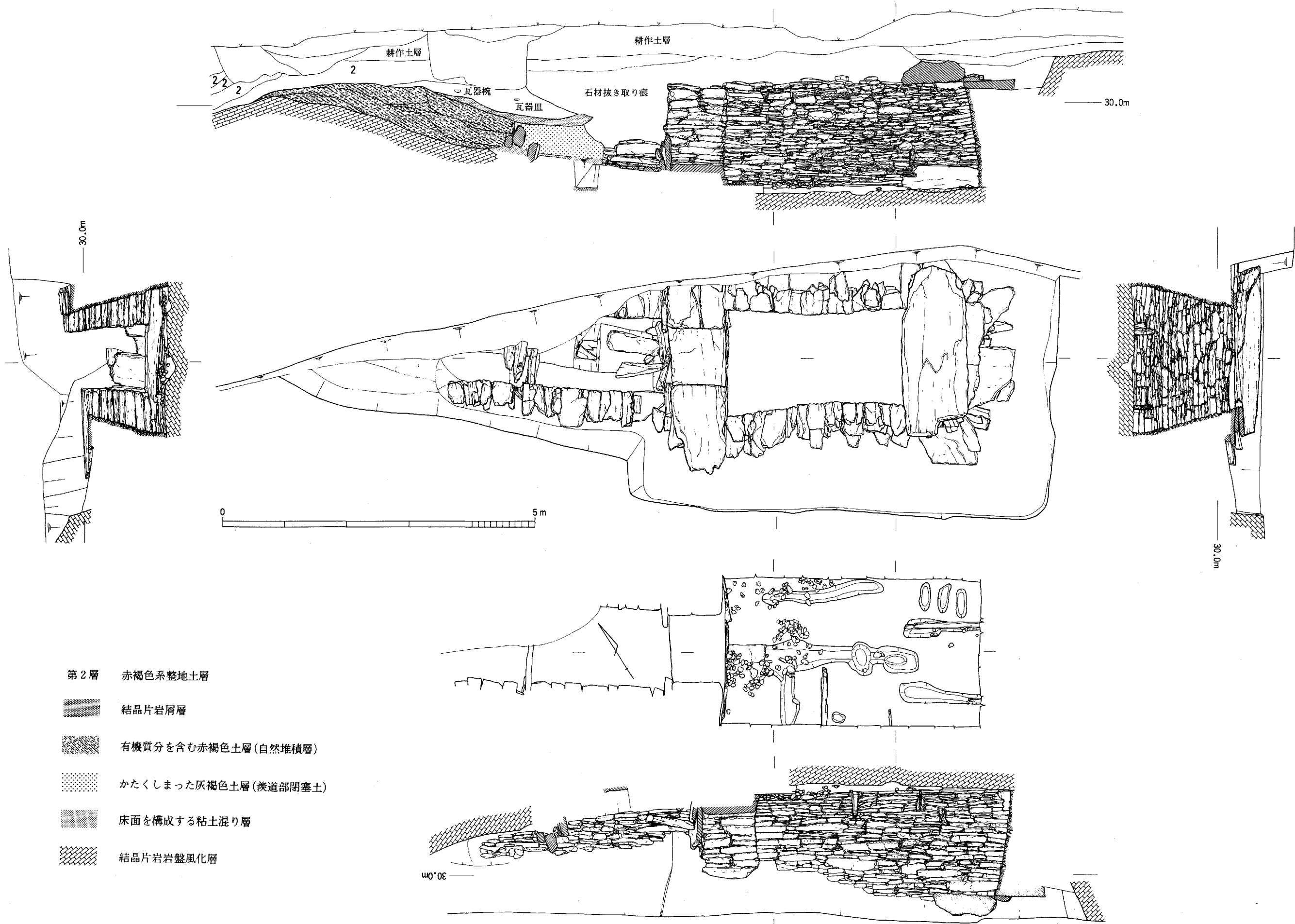
石室の上部の石材は果樹園の開墾時に持ち去られており、玄室閉塞石の上部や棺台・石障は13世紀末以前の盗掘時に破壊されていた。第6図の土層断面には、盗掘時の閉塞石を破壊した岩砕の堆積が良く観察できる。

A. 構造

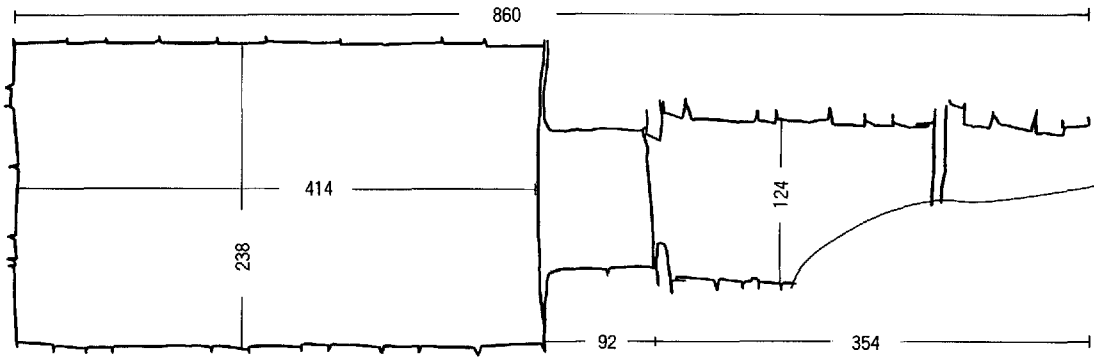
本古墳の主体部は西北に開口する両袖式の横穴式石室である。石室は玄室・玄室前道・羨道部からなっており、その平面規模は第7図に示した如くである。奥壁側には石棚と思われる巨石が載っており、平面形式と併せて岩橋型石室の特徴を示している。床面から石棚までの高さは約1.7mある。

玄室の奥壁・南側壁には都合二組の造り付けの棺台がある。奥壁側の棺台には造り付けの石障が付随しており、左右両側壁にその基部が遺存している。

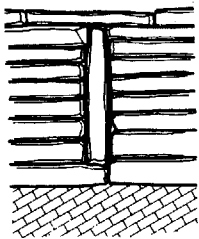
玄室の床面は円礫を敷き詰めていたものと思われるが、攪乱が著しく、原位置を保持した円礫の範囲



第6図 石室



第7図 石室の平面規模(cm)



第8図 棺台石組み
模式図

は僅かであった。羨道部の床面は粘土混じりの土で構成されており、開口部にゆくにしたがって高くなる。

排水溝は石室の主軸位置に掘削されており、玄門基石付近から羨道部では結晶片岩の薄い板石で蓋がされているが、玄室内は素掘りのままである。

石室の閉塞は玄門部と羨道部の二箇所でおこなわれ、いずれも閉塞石を保持する板石を側壁に造り付けた施設を持つが、羨道部のそれは羨道内に倒壊している。玄門部の閉塞には閉塞石の支えに使用された柱状の石材が遺存していた。両方の閉塞部の間は堅くしまった土で埋めてあった。

B. 石材・石積み

石室に使用された石材は全て結晶片岩の割り石である。石棚・玄門基石には巨石が使われ、玄室前道側壁には比較的大きな石材を使用しているが、その他の石室壁面の石材は小さい。

石積みはいわゆる「小口積み」を主としており、細かな割り石を使って間隙を埋め、各石材が水平面を保持するように配慮されながら積まれている。奥・側壁は上方にゆくにしたがって幅の狭くなる「持ち送り」という積み方がされているが、その際、石材が逆階段状にならないように壁面の各石材の下部の面取りを施している。造り付け棺台の仕口は第8図に示したものである。

また、石材の随所には切断痕とおもわれるミシン目状の円孔が認められる。

第3節 出土遺物 (第9・10図 巻頭図版 図版6・7)

玄室内は13世紀末以前の盗掘により攪乱されたため、原位置を保ったことが確実な遺物は玄室内では皆無であった。玄室内の遺物の多くは断片と化し、玄室内埋土の下部に無秩序に包含されていた。

原位置を保持した状態で出土したのは、羨道の床面に密着した状態で出土した耳環1点(201)と、羨道の埋土中から出土した瓦器碗4点(315・316他)だけである。瓦器類は盗掘以降のものと考えられる。

以下に遺物の概略を記述するが、掲載した土器類のデータについては土器一覧表を参照されたい。なお、同表にはハケ目・カキ目の単位として、器面に残る1cmあたりの見かけの条線数を示している。

A. 玉類 (巻頭図版)

合計177個ある。すべて玄室内埋土下部から出土したが、その多くは水洗により検出した。玉類の組成は多種多様で、その内訳けはガラス製トンボ玉1点・碧玉製管玉2点・グリーンタフ製管玉1点・水晶

製算盤玉2点・水晶製切り子玉1点・琥珀製管玉1点・埋もれ木製のナツメ玉および丸玉が各1点あり、残りはガラス製丸玉である。ガラス製丸玉を発色別にみると、青76・紺69・黄21・緑1となる。

B. 耳環 (200~208)

全部で9点あるが、(201)以外は全て玄室内埋土下部から出土した。現状では(200)のごく一部に金箔が遺存しているだけであるが、もとは全て銅製金張りのものとおもわれる。銅材の太さで細環(200~202)と太環(203~208)に分けられる。

C. その他の装身具類 (巻頭図版)

金製品・ガラス製品があるが、すべて玄室内埋土下部を水洗して検出した。金製品は二種類ある。一つは金箔を直径2mm程の銅線に巻つけたもので、同種のもので20点あり、一番長いもので約1.4cmある。もう一つは両側に粒状文のつく金箔で、幅3.5mm程の薄板に被せられていたものらしく、両側端が一方に折曲げられている。同種のもので14点あり、一番長いもので約1.8cmある。これらは冠もしくは冠帽の一部と考えられる。

ガラス製品は一点だけある。黒色を呈する直径3mm程の球状のもので、正確なことはレントゲン撮影を待たねばならないが、一箇所に針状の金属が埋め込まれているふしがある。

D. 刀装具 (209)

鉄地に銀象眼で装飾したもので、柄部と鍔部が一体に造られている。圏線と旋毛状の文様が鍔部の全面と柄部につく。内面に柄の木質が遺存している。玄室内埋土下部から出土した。

E. 鉄鏃 (210・211)

少なくとも14本分の断片が、玄室内埋土下部から出土した。全て鏃先が両丸式、篋被部の長い長頸族である。篋被部と茎部の境には小突起を造りだしている。

F. 馬具 (251~279)

いずれも玄室内埋土下部から出土したが、ことごとく遺存率が悪い。すべて鉄を基本素材としている。(251~255)は辻金具、(257~259)は雲珠もしくは責金具と思われるもので、押し金箔技法が施されたらしく、金箔や漆と思われる樹脂の被膜が遺存している。(260)はf字状鏡板とおもわれる断片。(256)は金銅張りの部分が見られ、大きさから判断して雲珠の宝珠と考えられる。(262~267)はこれらの飾り馬具の留め釘であろう。

(273・274)は鉸具、(275~279)は引手もしくは銜。(272)は反りのある薄い板状のもので、片面だけに木質が遺存しており、約4cm間隔で留め釘が打たれている。銜もしくは鞍の磯金具であろう。(268~271)は真ん中に木質の遺存したりベット状の金具で、鞍の前輪・後輪に使用されたものと思われる。木質から推定できる輪の幅は約2.6cmである。(261)は大型の釘頭。詳細は不明であるが、馬具の一部と考えている。

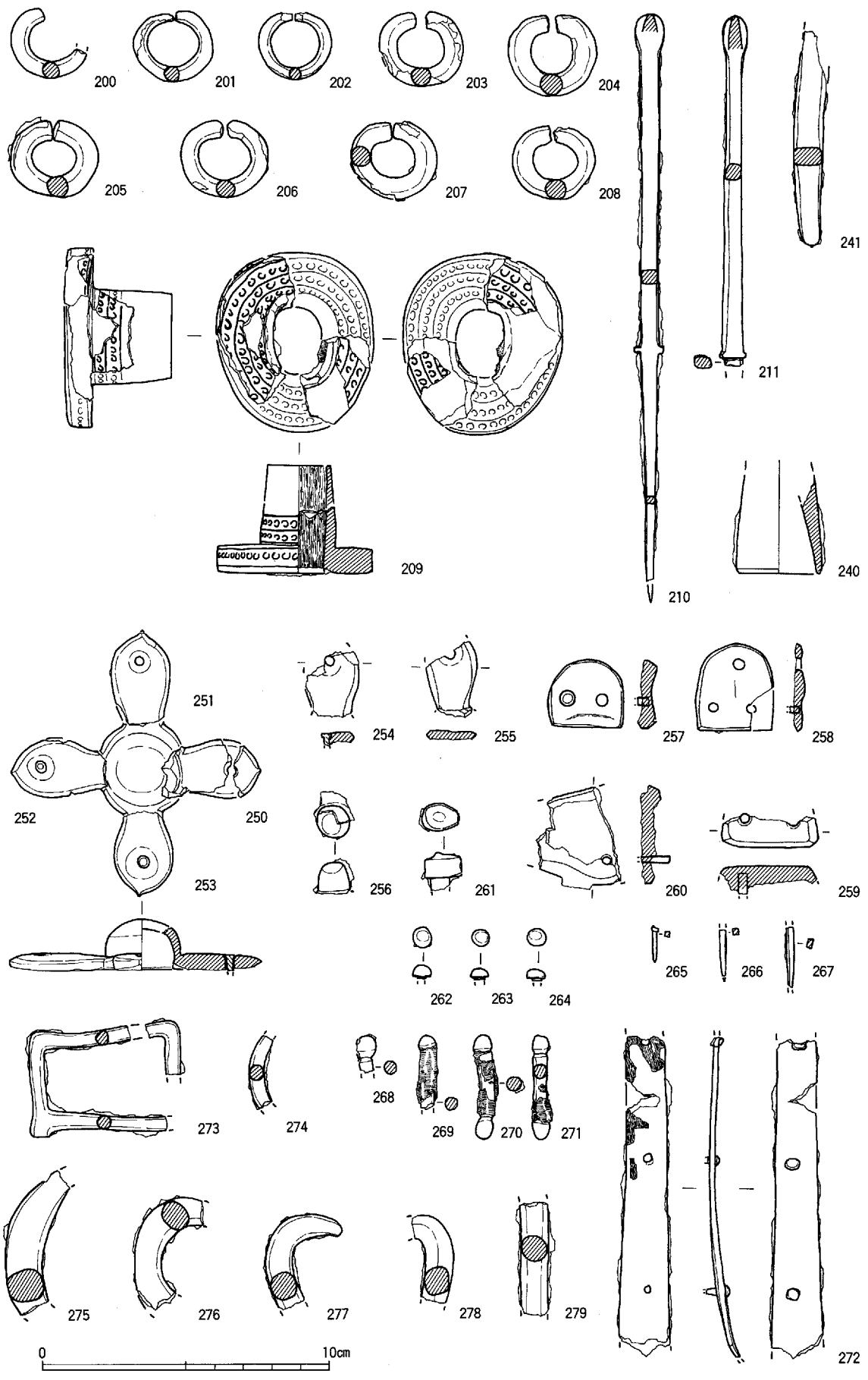
G. 不明鉄器 (240・241)

(240)は直径3cmほどの袋部状をなしており、蛇行状鉄器の可能性が考慮されよう。(241)は茎状のものである。

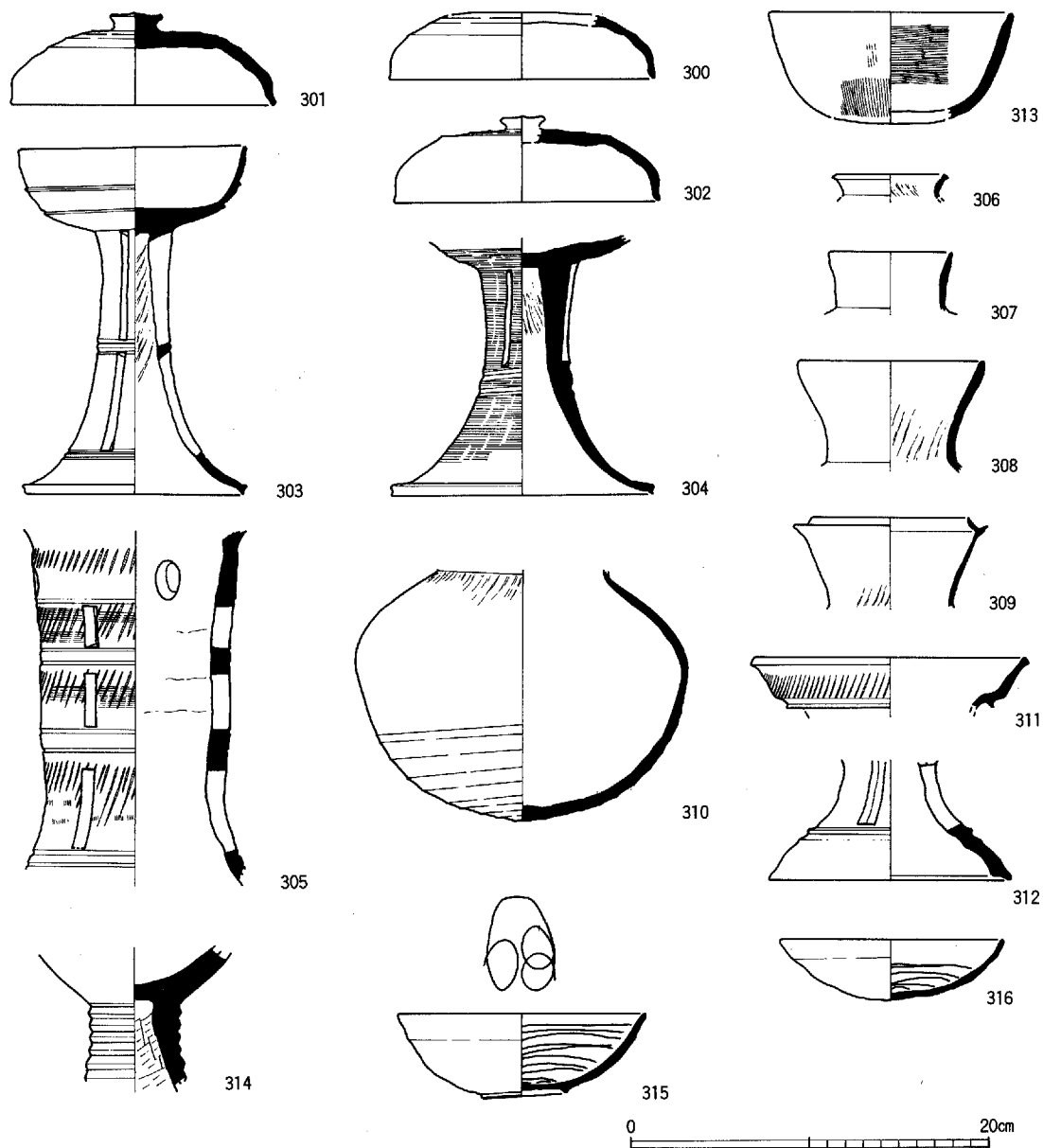
H. 土器 (301~316)

様々な位置・層位から出土した。完形品は少なく、断片が多い。

土器類のうち、畿内第III様式に比定できる弥生土器(314)は、隣接する吉礼III遺跡に関連する遺物ともくされ、瓦器碗(315・316)は盗掘以降の侵入者の遺品である。瓦器碗には高台の有無の相違があり、



第9圖 耳環・刀裝具・馬具・鉄鏃他



第10図 出土土器

型式差が考慮されるが出土状況には差異は認められない。

弥生土器は図示した高杯1点だけであるが、中世遺物は有台の瓦器碗5点・無台の瓦器碗3点・土釜1点がある。中世遺物のうち、土釜および有台の瓦器碗3点は玄室内埋土下部から出土し、残りは羨道部の埋土第2層から出土した。

他の須恵器・土師器が本古墳に直接関係する遺物と見做せる。図示したものの器種は一覧表を参照されたいが、全資料から推定できる副葬土器の最小個体数は、須恵器は高杯2・蓋3（高杯の蓋2を含む）・甗1・壺類8・甕2・器台2で、土師器は碗1・高杯1・壺1・甗1である。

須恵器類の型式上の特徴には、無蓋高杯が無文であることや蓋が凹線を欠いていることが挙げられ、概ねTK43型式平行期のものと判断できる。土師器碗もこれら須恵器と共伴するものとみてよいであろう。須恵器のうち蓋(301)・器台(305)には胎土中に結晶片岩粒が認められ、紀伊産のものである公算が強い。だとすれば、その生産地の有力な候補は、当古墳の近くにある吉礼砂羅谷窯跡であろう。

第Ⅲ章 ま と め (第1・11図)

以上、調査および遺物整理で得られた所見について簡単にふれてきた。これらの記述は必ずしも充分なものではないが、本古墳が大規模な横穴式石室と墳丘を持ち、冠類・飾り馬具・飾り太刀など古墳の規模に相応しい豪華な副葬品を持っていたことが判明した。

この古墳には、耳環の数から少なくとも5人以上の被葬者が推定でき、追送行為が考慮されるが、出土土器には明瞭な型式差は認められない。出土土器の年代観は6世紀後葉と考えて大過ないが、出土土器がすべて最終埋葬時のものと考えられることもできる。したがって6世紀後葉は本古墳の築造の下限年代と理解できる。

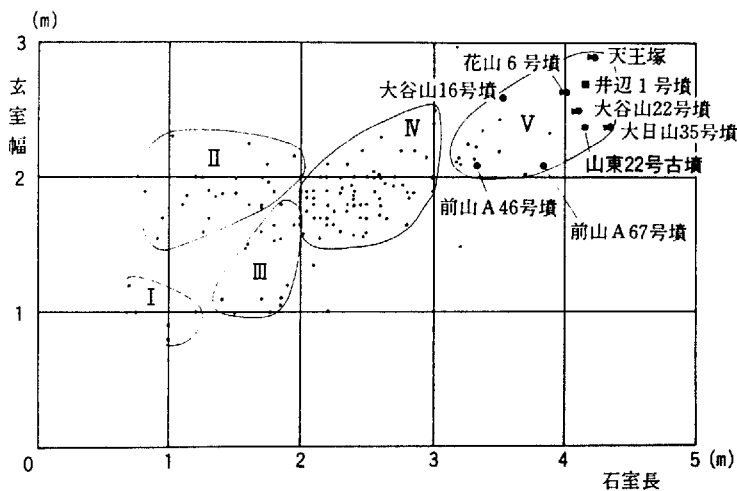
それでは、本古墳の被葬者が如何なる地位にいたものであろうか。本古墳はその位置および石室の型式からみて岩橋千塚古墳群を構成するものと見ることができ、この課題も同古墳群内の序列関係を見ることになる。古墳の序列は墳型・墳丘規模にあらわれているものと理解されている。これらほど可視的なものではないが、石室の規模も被葬者もしくは築造者の勢力を推定するバロメーターとなろう。そこで、岩橋千塚古墳群の6世紀後半代に比定される古墳と本古墳を、墳型・墳丘規模・石室規模について比較を試みる。

墳 型

岩橋千塚古墳群の造営主体は紀国造に関係する集団とされており、国造あるいは国造を輩出する集団は前方後円墳を造ったものと理解できる。本古墳は円墳の公算が強いため、その被葬者はこれらの階層よりは下位に属するとみることができる。

墳丘規模

岩橋千塚古墳群には、あまり大規模な円墳・方墳はない。今のところ、直径もしくは一辺が30mを超える規模の古墳は井辺^{いんべ}1号・井辺12号墳が知られているだけで、これらは何れも方墳である。ついで規模の大きいのは直径26~28mクラスの円墳で、前山A46・前山A67・大谷山16号墳が挙げられる。その他は何れも直径20m以下の規模となる。したがって、直径26~28mの規模をもつ本古墳は岩橋千塚古墳群では最大規模の円墳となり、より規模の大きい少数の方墳の存在を考慮しても、本古墳の被葬者は前



第11図 岩橋型横穴式石室の玄室平面規模(黒石哲夫原図に加筆)

方後円墳の被葬者に次ぐ地位にあるものとみることができる。

石室規模

第11図に岩橋型石室の玄室の平面規模を示した。I~Vは、この図の原作者による時期区分で、古墳の時期と玄室の規模や長短辺の比率が関連していることがわかる有用な資料である。

第11図によると本古墳の玄室の規模が非常に大きいものであることがわかる。その規模は国

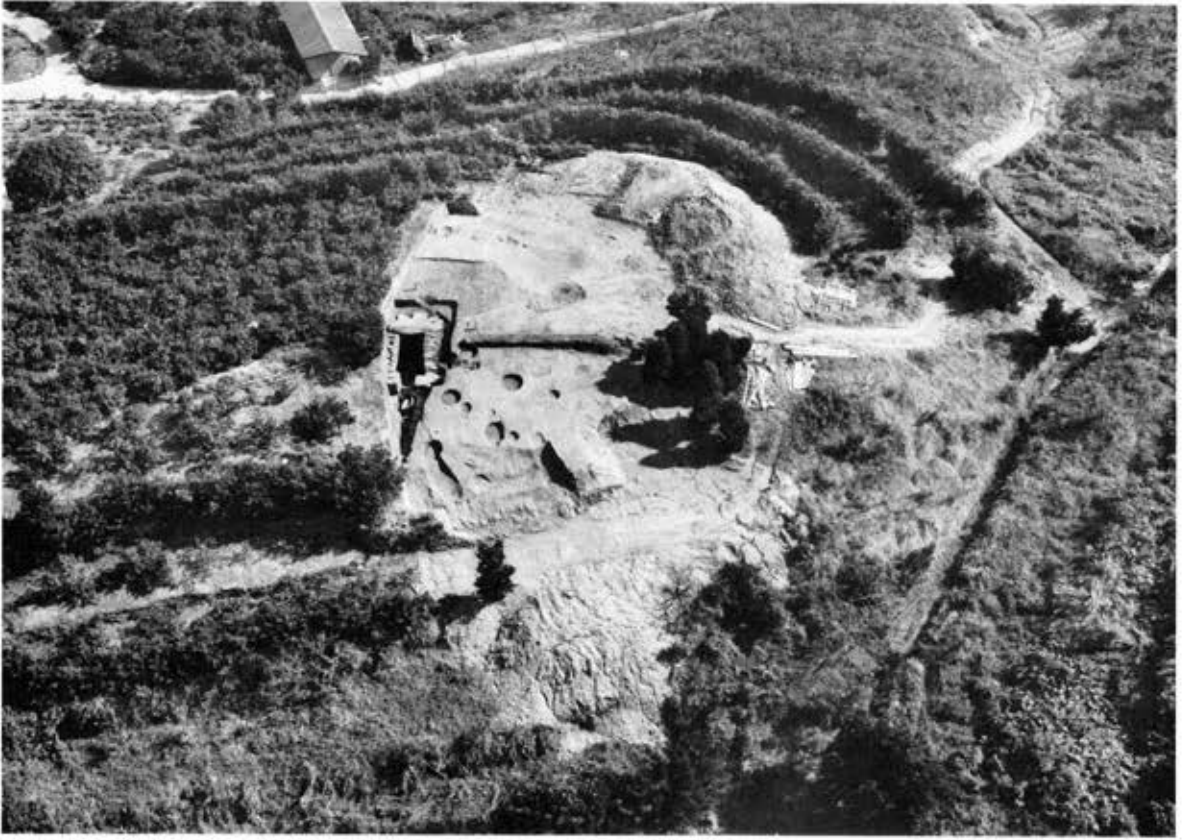
造層の前方後円墳の玄室に匹敵し、先に挙げた本古墳と同規模の墳丘をもつ円・方墳のなかでも最大級とみてよい。玄室の規模は多葬の必要性和無縁ではなく、古墳の時期や地域性を考慮しなくてはならないが、同じ地域・同時期の古墳の比較は直接の意味があろう。したがって、玄室の規模からみても、本古墳の被葬者は岩橋千塚古墳群のなかでは国造層に次ぐ勢力をもった階層とみることができる。

以上の三点の検討をとおして、岩橋千塚古墳群内での本古墳の被葬者が占める地位があきらかとなった。本古墳の被葬者は国造もしくはそれを輩出する階層ではないが、それに次ぐクラス、すなわち国造層をささえる少数の有力な豪族層の一員と考えることができる。そう考えれば、この被葬者が冠類・飾り太刀・飾り馬具等の、県下では出土例の少ない豪華な遺物を持っていたことも当然といえる。

土器一覧表

番号	挿図番号 図版番号	出土位置 層位	種類	器形	法量「cm」	遺存率	胎土	色調	焼成	手法
					口径・器高(残存高)					
300	11	羨道部埋土 第2層上部	須恵器	蓋	φ=14.7 h=3.6	30%	2~3mm大の 白色砂粒を含む	内・暗青灰色 外・暗赤褐色 断・〃	硬	天井部回転ヘラケズリ ロクロ回転時計廻り
301	11	玄室内6区 岩盤上面	須恵器	蓋	φ=14.6 h=5.2	100%	3mm以下の白色 砂粒・結晶 片岩粒を含む	内・暗青灰色 外・暗紫色 断・〃	硬	天井部回転ヘラケズリ 内面中心部一定方向ナデ ロクロ回転時計廻り
302	11	玄室内5区 埋土第2層上部 玄室内6区 埋土第2層下部	須恵器	蓋	φ=14.7 h=3.9	30%	2~3mm大の 白色砂粒を含む	内・暗灰色 外・〃 断・チョコレート	硬	天井部回転ヘラケズリ ロクロ回転時計廻り
303	11	玄室内5区 岩盤上部	須恵器	無蓋 高杯	φ=12.2 h=19.7	100%	1mm大の白色 砂粒をわずか に含む	内・黒色 外・〃 断・淡灰褐色	硬	杯底部回転ヘラケズリ・回転ナデ 杯底部内面丁重な一定方向ナデ ロクロ回転反時計廻り
304	11	羨道部埋土 第1層下部 玄室前道埋土 第1層下部	須恵器	高杯	h=14.5	80%	1mm以下の白色 砂粒を含む	内・黒灰色 外・〃 断・チョコレート	硬	杯底部回転ヘラケズリ・カキ目 脚部外面カキ目(7本/cm)
305	11	羨道部埋土 第1層上部	須恵器	器台	h=20.0	25%	1mm大の白色 砂粒・結晶片 岩粒を含む	内・灰色 外・〃 断・赤褐色	軟	一次調整カキ目(5本/cm) 刺突文(5本/cm) 内面粘土継接合痕
306	11	玄室内3区 埋土第2層上部	須恵器	広口 壺	φ=6.2 h=1.6	30%	砂粒を含まな い	内・暗灰色 外・〃 断・チョコレート	硬	頸部シボリ目 ロクロ回転方向時計廻り
307	11	玄室内6区 岩盤上	須恵器	直口 壺	φ=6.8 h=3.5	50%	1mm以下の白色 砂粒をわずか に含む	内・暗灰色 外・〃 断・淡赤褐色	硬	ロクロ回転方向不明
308	11		須恵器	長頸 壺	φ=10.3 h=6.3	80%	2mm大の砂粒 をわずかに含 む	内・淡灰褐色 外・〃 断・淡茶褐色	硬	内面シボリ目 ロクロ回転方向反時計廻り
309	11	玄室内5・6区 埋土第2層上部	須恵器	有蓋壺	φ=8.7 h=5.2	40%	1mm以下の白色 砂粒をわずか に含む	内・暗灰色 外・〃 断・〃	軟	受け部オリコミ 頸部シボリ目 ロクロ回転方向時計廻り
310	11	玄室内5区 岩盤上面	須恵器	壺	h=14.0	100%	3mm大の白色 砂粒をわずか に含む	内・淡灰褐色 外・〃 断・灰色	中	底部外面回転ヘラケズリ 頸部シボリ目 底部内面不定方向ナデ ロクロ回転方向時計廻り
311	11	玄室内6区 岩盤上面	須恵器	甗	φ=15.0 h=3.0	20%	砂粒を含まな い	内・黒色 外・黒緑色 断・淡灰褐色	硬	回転方向不明 ヘラ描き文
312	11	玄室内5・6区 埋土第2層上・下部	須恵器	台付壺	h=6.7	90%	砂粒を含まな い	内・淡灰褐色 外・〃 断・淡茶褐色	硬	ロクロ回転方向不明
313	11	玄室内埋土 第2層	土師器	椀	φ=13.5 h=5.9	20%	砂粒を含まな い	内・赤褐色 外・〃 断・〃	硬	内外面一次調整ハケ目(5本/cm) 口縁部外面ヨコナデ
314	11	玄室内埋土 第1層	弥生土 器	高杯	h=8.3	90%	3mm大の砂 粒・クサリ礫 を含む	内・淡赤褐色 外・〃 断・〃	中	・凸帯文 ・脚部内面ヘラケズリ
315	11	羨道部埋土 第1層	瓦器	椀	φ=13.8 h=4.8	60%	砂粒を含まな い	内・黒灰色 外・〃 断・灰白色	軟	連結輪状暗文
316	11	羨道部埋土 第1層	瓦器	椀	φ=12.4 h=3.5	100%	砂粒を含まな い	内・黒色 外・〃 断・灰白色	硬	連続圏線状暗文

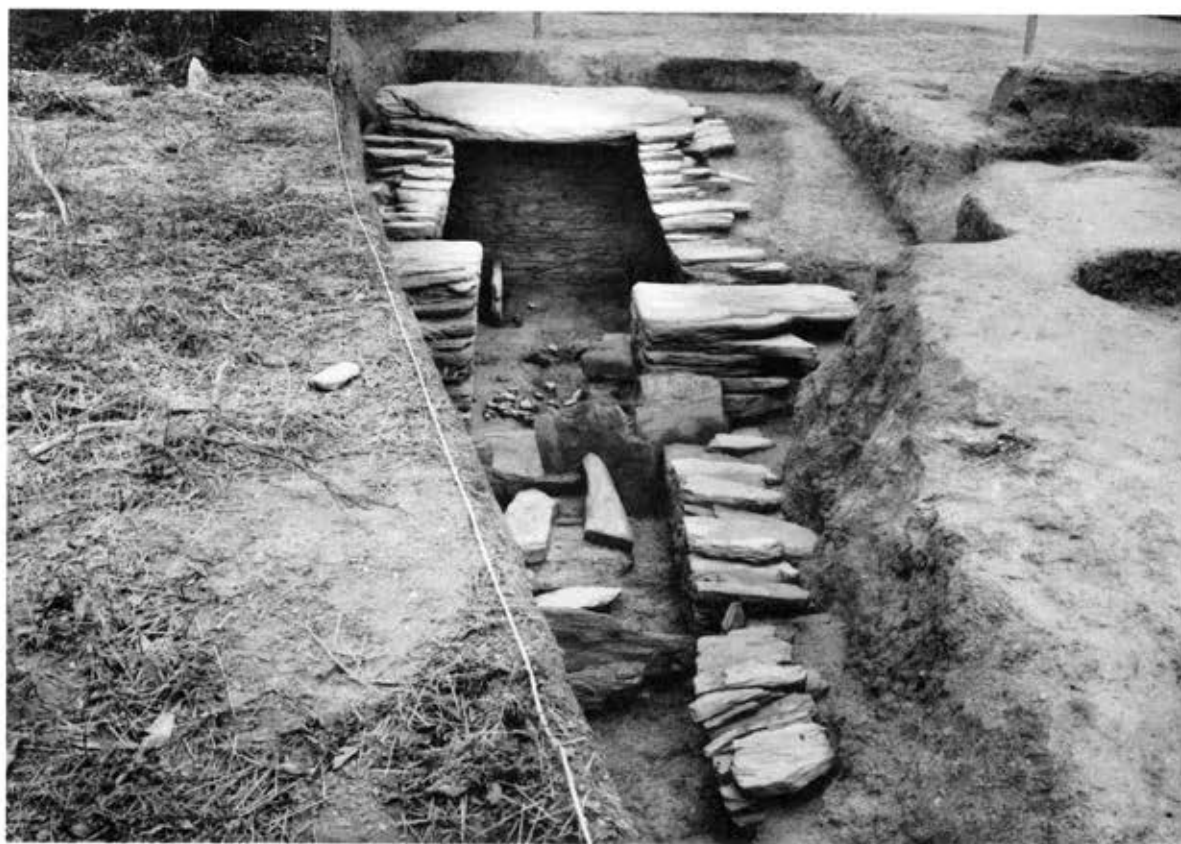
版 图



1 全景（空中西から）



2 墳丘（西から）



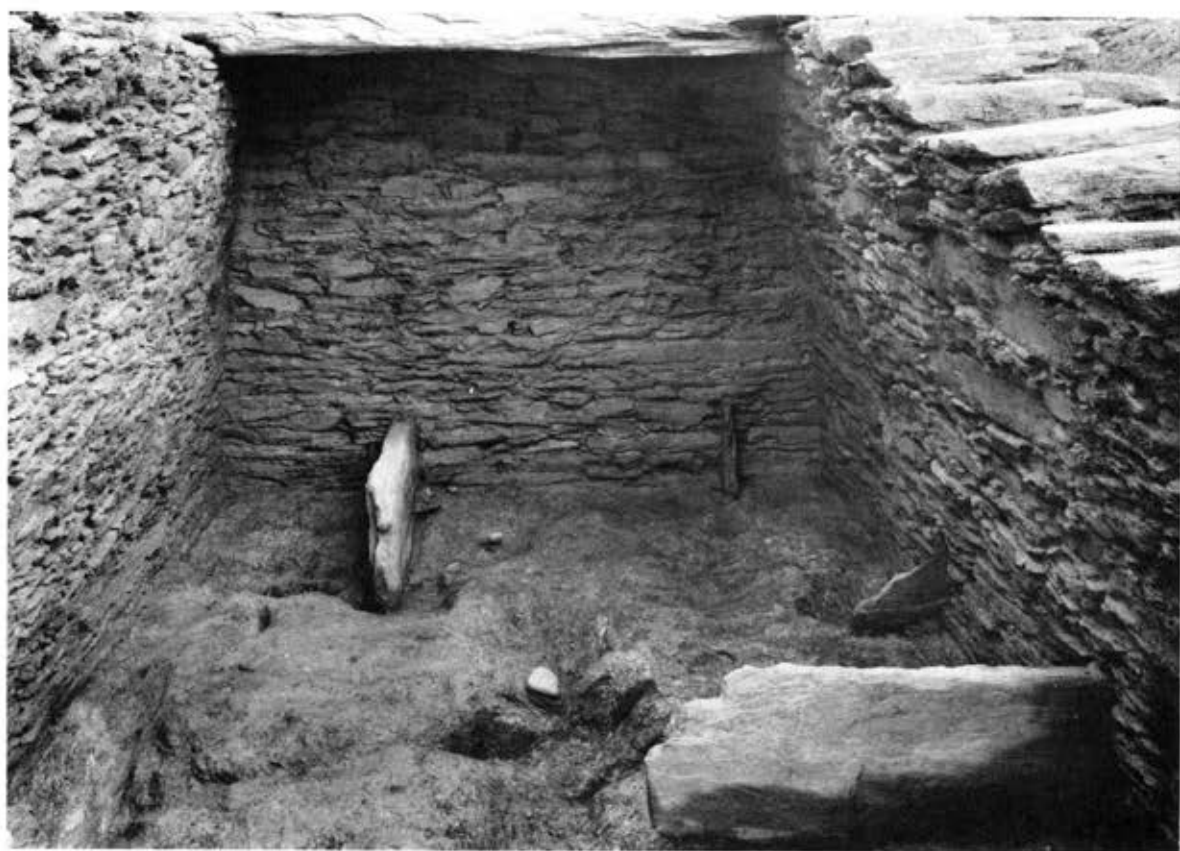
1 石室（北西から）



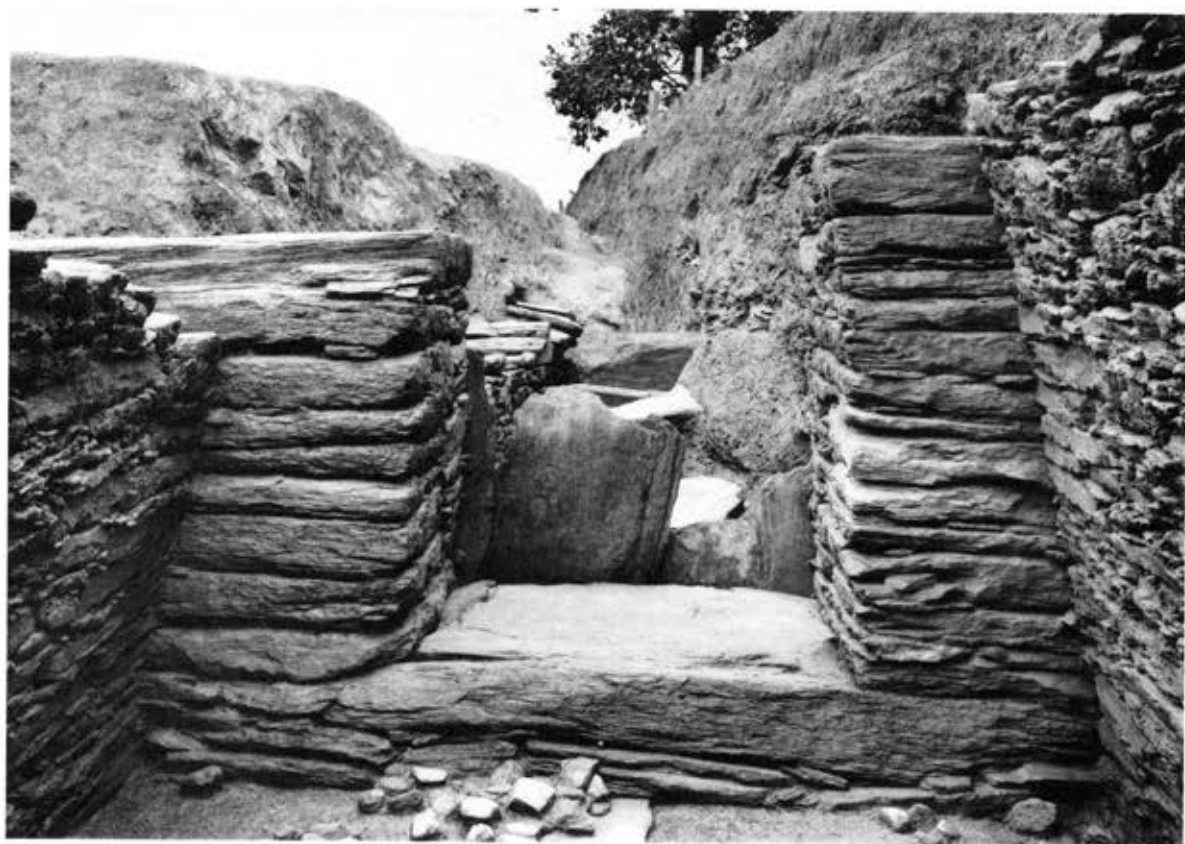
2 同上（東南から）



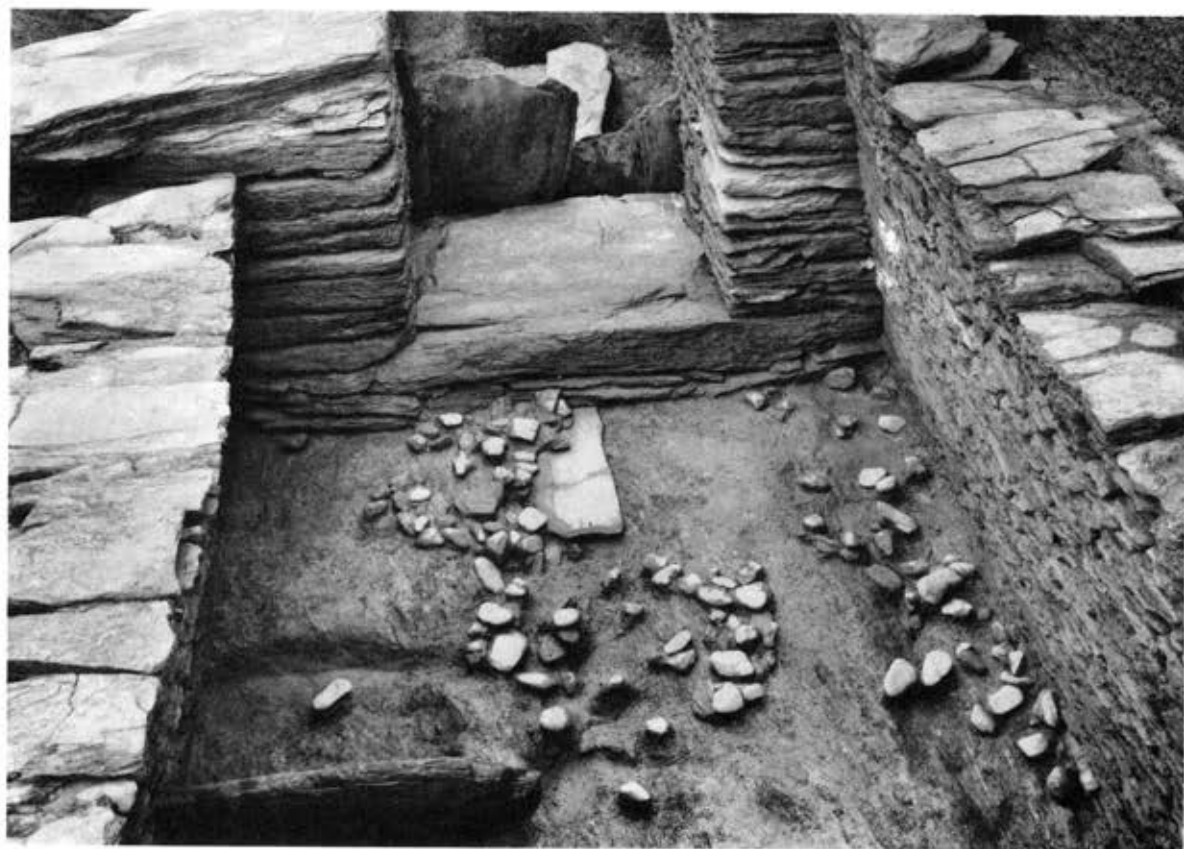
1 側壁（南西から）



2 奥壁と棺台（玄門側から）



1 玄門（奥壁側から）



2 床面の状況（奥壁側から）



墳丘の状況



溝状遺構



棺台の仕口



棺台と石障の仕口



石棚の加工と側壁



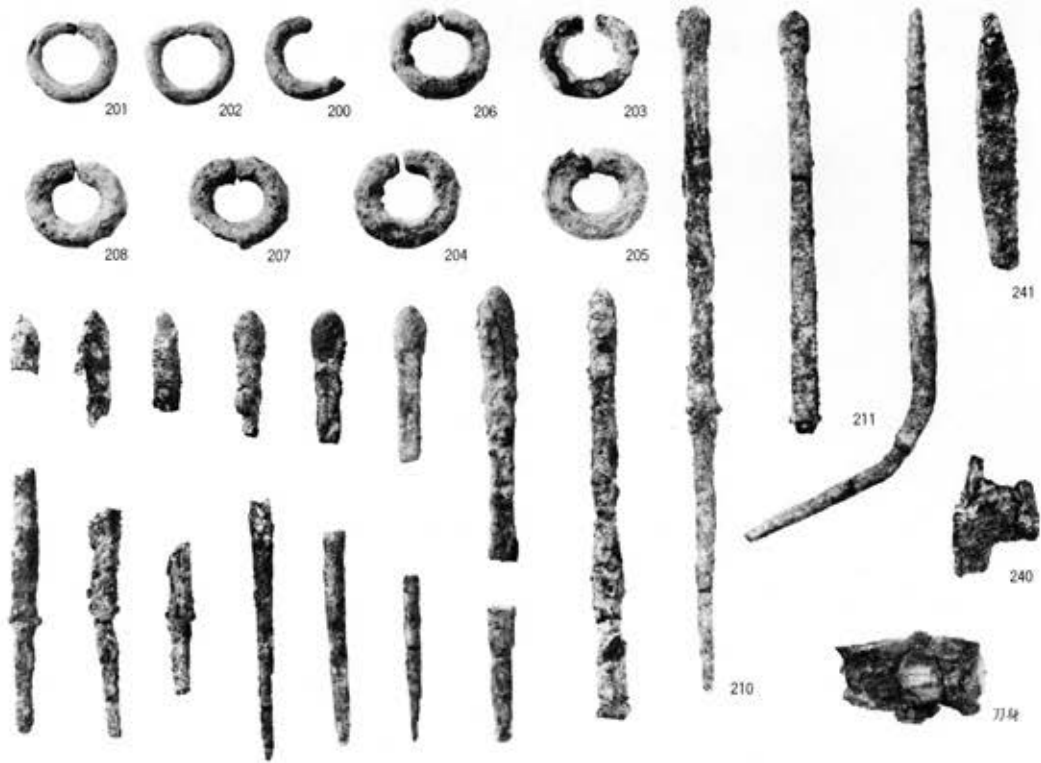
石材の切断痕



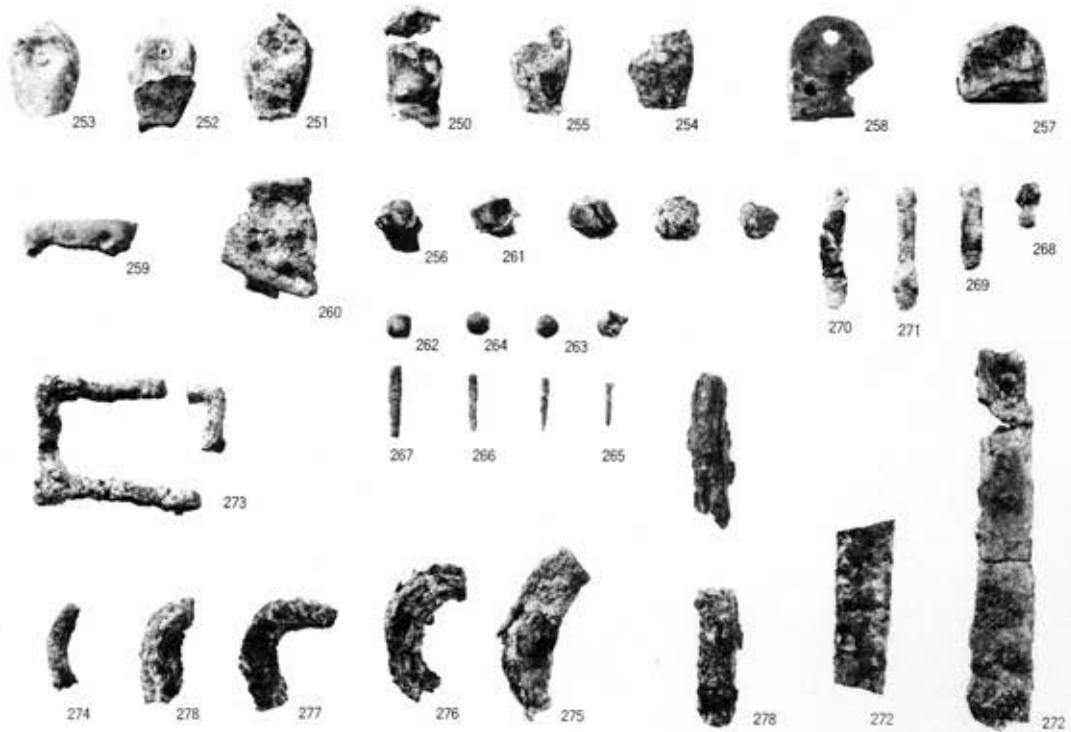
側壁の加工



羨道部の排水溝



耳環・鉄鏃・その他



馬具類



301



308



304



310



312



303



313



315



316

山東22号古墳

— 県道和歌山橋本線改良工事に伴う発掘調査概報 —

1992年3月

編集・発行 和歌山県文化財センター

印刷 眞陽社